

A 病棟の日勤休憩時間に関する現状の調査

Keyword:休憩時間、労働、業務量

C 棟 8 階○佐古泰葉、橋本宜子、日比由衣子

I.はじめに

近年、日本看護協会が行なった「病院看護職の夜勤・交代制勤務等実態調査」では、過労死につながりかねない長時間労働がある、休憩がとりにくい、など健康のリスクが示されている¹⁾。また、金子らの研究では、長時間労働はエラーの誘発要因となりうる²⁾とされている。さらに、日勤帯において 45 分未満の休憩は安全な医療提供の観点から十分な休息とは言えず、最低でも 45 分以上の休憩時間を確保することが望まれる³⁾とも述べている。

休憩時間とは、労働者が権利として労働を離れることを保障された時間であり、規定時間とすることが推奨されている。B 病院では日勤休憩時間が本年度より 45 分より 60 分に変更となった。しかし、A 病棟では日勤従事者が 60 分の休憩を確保出来ていないと感じた。その要因として、業務が多忙であること、休憩時間に対する個人の意識の違いなどが影響していると考えた。

本研究では、A 病棟スタッフの休憩時間に対する意識調査と、日勤業務量調査を行うことで、休憩時間を確保できているのか、またできていない場合にはその要因を明らかにしたいと考える。

II.目的

本研究の目的は、A 病棟の日勤休憩時間の現状の把握と、休憩をとれていない場合にはその

要因を明らかにすることである。

現状を明らかにすることで、今後、看護師の心身の疲労の改善につながり、患者へよりよい看護を提供できると考える。

III.方法

1.期間

意識調査:2012 年 9 月 23 日～9 月 29 日

業務量調査:2012 年 9 月 23 日～10 月 6 日

2.調査対象

研究に同意が得られた A 病棟看護師 29 名

3.調査方法

休憩時間に対する意識調査と、業務量調査意識調査は以下の項目について質問した。

表 1.休憩時間に対する意識調査項目

- | |
|---|
| 1. 休憩は 1 時間とりたいですか？ |
| 2. 現在、日勤休憩時間はおよそどのくらいとることができていますか？ |
| 3. 日勤休憩時間がどのくらいとれると充分休憩できたと感じますか？ |
| 4. 休憩を充分とれたと感じる時とそうでない時とで差が出てくると思われる項目はなんですか？ |
| 5. 休憩中に休憩を中断して業務にあたることはありますか？ |
| 6. 休憩に入る時に他スタッフへ依頼しやすい業務はなんですか？ |

業務量調査では、A 病棟で主に行われている日勤業務を挙げ、ケアに関するもの 5 項目【清潔ケア】【排泄介助】【食事介助】【環境

整備】【体位変換・リハビリテーション】、患者指導やオリエンテーションに関するもの 4 項目【患者オリエンテーション】【入院時アナムネーゼ聴取】【自己注射や酸素管理などの指導】【受け持ち患者・家族とのコミュニケーション】、処置・検査に関するもの 5 項目【診察・処置介助】【与薬】【巡視】【バイタルサイン測定】【移送】、医療者間での情報伝達や情報収集に関するもの 5 項目【記録】【受け持ち患者の情報収集】【患者カンファレンス】【指示受け】【申し送り】、その他共同業務や緊急入院時の対応などに関するもの 4 項目【共同業務】【緊急入院・急変時の対応】【電話対応】【受け持ち患者以外の対応】の全 23 項目とし、独自に調査票を作成した。

また、調査票に臨床経験年数、日勤業務の終了時刻、休憩時間、休憩の前後半についての記入欄を設けた。

4. 分析方法:データの単純分析

調査対象を群分けし、それぞれの群で検定(一元配置分散分析、T 検定)をかけ、群間で業務量や意識に違いがあるかを比較した。経験年数での群分けは Benner のドレイファイス・モデルの看護への運用⁴⁾を参考に、1~3 年目看護師(一人前レベル)9 名を I 群、4~5 年目看護師(中堅レベル)6 名を II 群、6 年目以上(達人レベル)は 12 名おり、6~19 年目看護師 6 名を III 群、20 年目以上看護師 6 名を IV 群とした。

5. 倫理的配慮

スタッフに研究の趣旨、研究内容・方法を書面にて説明し、書面にて同意を得た。本研究は看護部看護研究倫理委員会より承認を受けている。

IV. 結果

アンケートによる意識調査用紙の回収率、有効回答数はともに 100%、業務量調査用紙の回収率は 86.2%、有効回答率は 82%であった。

意識調査より「休憩時間を 1 時間とりたいですか」の回答は、はい 11 名、いいえ 18 名であった。(図 1)

また「日勤休憩時間がどれくらいとれると充分休憩できたと感じることができますか」の回答は、40 分以上 50 分未満が 10 名、50 分以上 60 分未満が 11 名、60 分が 6 名であった。(図 2)

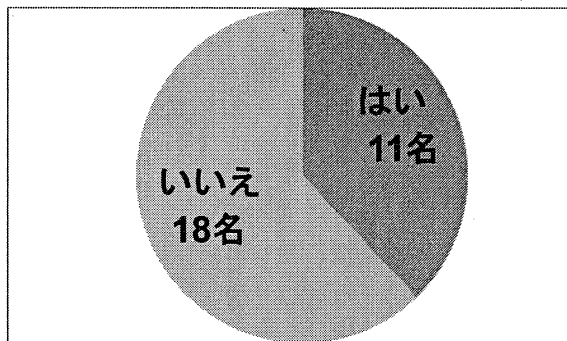


図 1:休憩時間を 1 時間とりたいですか

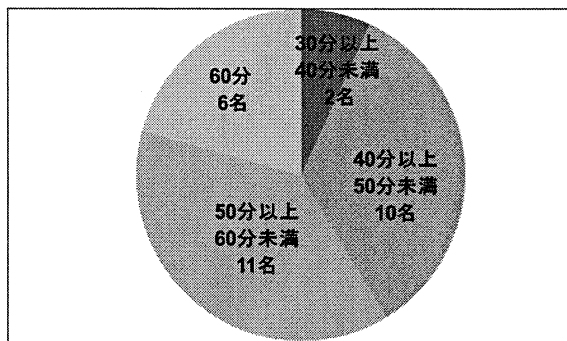


図 2:日勤休憩時間がどれくらいとれると充分休憩できたと感じることができますか

「休憩中に休憩時間を中断して、業務にあたることはありますか」の回答は、はい 24 名、いいえ 5 名であった。(図 3)

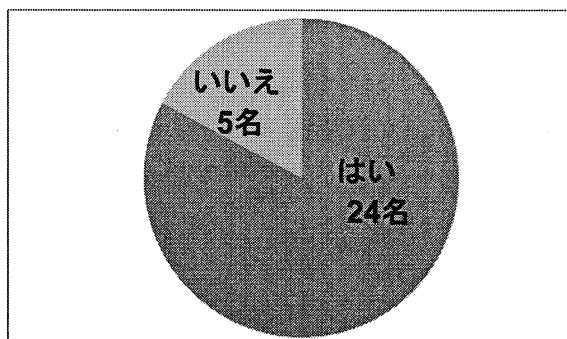


図 3:休憩中に休憩時間を中断して業務にあたることはありますか

「気分・作業効率・疲労感のうち、休憩を充分とれたと感じる時と、そうでない時とで差が出てくると思われるのは何ですか(複数回答可)」の問いに対しては 23 名が気分、18 名が疲労感、11 名が作業効率と回答した。

自由記載回答では、時間内に業務を終わらせたいなど、休憩時間を意図的に短くしているという意見や、休憩室が狭くゆっくり休憩できないといった意見もみられた。

「休憩に入る時に他スタッフへ依頼しやすい業務は何ですか(全 9 項目複数回答可)」では、経験年数別のチェック数の平均は I 群 1.81 個、II 群 2.5 個、III 群 3.66 個、IV 群 4.5 個と学年が上がるにつれ依頼しやすい業務項目が増えていく傾向にあり、I 群と IV 群の回答数に有意差がみられた。

日勤業務量調査より、休憩時間の平均値は 45.6 分であり、45 分以上休憩をとれているスタッフは全体の 58%であった(n=49)。(図 4)

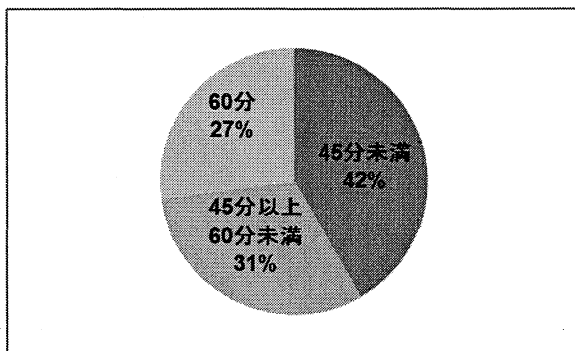


図 4:日勤休憩時間別スタッフの割合(n=49)

経験年数別に IV 群に分けた際、休憩時間の平均は I 群 47.5 分、II 群 41.25 分、III 群 44 分、IV 群 49.1 分であり、各群の休憩時間に有意差はなかった。

各群で 45 分以上休憩をとれていた割合は、I 群 62.5%、II 群 41.67%、III 群 60%、IV 群 63.64%であった。(図 5)

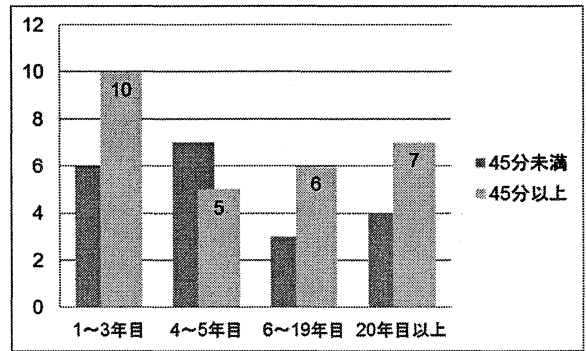


図 5:経験年数別休憩時間

休憩時間を 45 分以上とれている群ととれていない群に分けた際、各群で日勤業務項目における業務時間に有意差はなく、休憩時間前半と後半の各群でも業務項目における業務時間に有意差はなかった。

リーダー業務を行う学年は 4 年目以上であり、各群の日勤リーダー回数に有意差はなかった。

V. 考察

I 群(1~3 年目)の平均休憩時間は 47.5 分、45 分以上の休憩をとれている割合は 62.5%と比較的休憩時間がとれていた。その要因としては、リーダーの采配が良いこと、7:1 看護導入後の就職であり、ゆとりのある環境に慣れていること、1 年目に関しては入職時より 60 分休憩という環境に慣れていることなどが考えられる。

II 群(4~5 年目)の平均休憩時間は 41.25 分、45 分以上の休憩をとれている割合は 41.67%と他の群と比較して休憩をとれていない傾向にあった。平野らの中堅看護師の役割遂行におけるストレス調査によると、リーダー経験年数 2 年未満の看護師はリーダー経験年数 2 年以上の者より、日勤リーダー業務において有意にストレスを感じていたと報告されている⁵⁾。また、このことは日勤リーダー業務の経験期間が浅く、対応能力が未熟なためだと考えられる⁶⁾とされている。このことから、4~5 年目が休憩をとれていない要因として、リーダー経験が

2年未満と少なく、業務をうまく采配できずに自分で抱え込んでしまう傾向にあること、リーダーとして他スタッフへの配慮などが影響していると考えられた。

Ⅲ群(6~19年目)、Ⅳ群(20年目以上)では、平均休憩時間が45分前後であり、45分以上の休憩をとれている割合が60%以上であることから、比較的安定して休憩をとれているように思われた。その要因として、一日の業務調整ができることや、他の群に比べ業務を依頼しやすい傾向にあり、休憩前後の業務の引継ぎがスムーズであることなどが考えられた。

意識調査では「休憩時間を60分とりたいですか」の問いに半数以上がはいと回答し、約8割が60分未満で充分休憩できたと感じていることから、60分間休憩をとる必要性を感じていないため、意図的に早く切り上げているのではないかと考えられた。金子らは日勤帯では45分以上休憩を取得している場合は45分取得できていない場合と比較してエラー・ニアミスの発生が0.75倍となり、さらに60分休憩を取得した場合は60分取得できていない場合と比較してエラー・ニアミスの発生は0.69倍となることが示された⁷⁾と述べている。これより、休憩時間の長さや安全面は大いに関係しており、休憩時間をとることには意味があり、看護師がとる必要性を感じていなくてもとらなければならないと考える。

また、「休憩中に休憩を中断して業務にあたることはありますか」では83%がはいと回答しており、休憩場所が詰所のすぐ隣に位置し、すぐに業務につける場所であることなどからゆっくり休憩できない環境となっている。このことから、休憩場所の環境も、休憩時間を短くする要因のひとつであると考えられた。しかし、現状では休憩を充分とれる環境ではなく、今後休憩場所の環境を整えることや、看護師の意識改善などに努めていく必要があると考えられる。

Ⅵ. 結論

- ・A病棟全体の58%が45分以上休憩をとれていた。
- ・経験年数別では4~5年目が休憩時間をとれていない傾向にあった。
- ・A病棟看護師が60分間休憩をとる必要性を感じていないため、意図的に休憩時間を短くしている。
- ・休憩場所の環境が、休憩時間を短くする要因のひとつである。

Ⅶ. 引用・参考文献

- 1) 日本看護協会,「夜勤の負担軽減と長時間労働の是正をめざして」~日本看護協会はこちら考える~,2012年12月5日アクセス,<http://www.nurse.or.jp/nursing/practice/shuroanzen/>
- 2) 金子さゆり,濃沼信夫,伊藤道哉:病棟勤務看護師の勤務状況とエラー・ニアミスのリスク要因,日看管会誌, Vol.12, No.1, p.5-15, 2008年
- 3) 同上
- 4) 城ヶ端初子,実践に生かす看護理論 19 第1版,株式会社医学芸術社, p.214-216, 2005年
- 5) 平野弥生,高橋明子,佐藤孝子:中堅看護師の役割遂行におけるストレス調査,第40回日本看護学会論文集(看護管理), p.24-26, 2009年
- 6) 同上
- 7) 金子さゆり,濃沼信夫,伊藤道哉:病棟看護師の超過勤務および休憩時間と患者安全との関係,医療の質・安全学会誌, Vol.12, No.4, p.358-364, 2007年